立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）
２０１２年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属･職名	氏　名
	文学部・教授	石川　巧　印
研究課題	戦後占領期に「地方」で刊行された雑誌・新聞に関する総合的研究	
研究組織	所属大学名等・職名	氏　名
	立教大学・教授	石川　巧
	立教大学・教授	井川充雄
	立教大学・兼任講師	吉田則昭
	立教大学大学院 博士後期課程	住友直子
研究期間	2011　年度　～　2012　年度	

研究経費	2011　年度	2012　年度	総計
	2880　千円	**3000**　千円	**5880**　千円

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本プロジェクトは、占領期（1945 年 8 月～1952 年 4 月）に刊行された雑誌・新聞を網羅的に調査することによって、混乱期の日本において、どのような「言論」と「表現」が展開されていたのかを検証しようとしたものである。共同研究に際しては、GHQ の占領政策、メディア史、プロパガンダ、社会意識の形成といった観点からの考察を試みる社会学的アプローチと、出版文化、言論と検閲、戦後の新しい文芸思想を探究する文学的アプローチを組み合わせ、それぞれが独自の分析・読解を試みつつ、相補的に関わりながら研究を進めた。特に、本プロジェクトでは「地方」という視点を重視し、①それぞれの雑誌・新聞に地域の独自性・特異性、②「地方」から「中央」に向けて発信された情報とその価値、③「地方」の雑誌・新聞が戦後日本の新しい社会、文化、風俗の生成に果たした役割、などの考察に力点を置いた。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　占領期　〕〔　地方　〕〔　雑誌　〕

研究【経過・成果】の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

ひとくちに占領期（1945 年 8 月～1952 年 4 月）の地方雑誌・新聞といっても、地域学校、業界、職場などが組織的に刊行したものから、俳句・短歌などの同人誌、個人誌に至るまで、その内容は雑多である。したがって、二年間という期間でひとつのプロジェクトをまとめるためには、ある程度、対象とする雑誌のジャンルを絞りこみ、特定の分野を網羅的に集める必要があった。そこで、①本プロジェクトが社会学と文学の研究者による共同研究であること、②占領期の日本で地方の歴史・文化・風土といったものがどのように語られていたのかを課題のひとつに掲げていること、③地方に疎開・在住していた言論人や文学者の未発見資料を採取しようと考えていることを考慮し、雑誌に関しては総合文化誌、主要文芸誌を対象にすることにした。次に「地方」という概念についてだが、すでに研究の概要にも記したように、本研究の重要な視点は、占領期の日本に極めて雑多な言説が溢れていたこと、それぞれの地域が自前のメディアをもって地域の復興に力を注いでいたことに価値を見いだそうとするところにあった。GHQ／SCAP が占領政策として再構築しようとした「日本」（＝まなざされる「日本」）ではなく、それに抵抗するように地域性を主張したメディアの多様性を掬いあげることに価値があると考えたわけである。したがって、第一段階としては、各地域の主要都市（札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、金沢、京都、大阪、神戸、高松、広島、福岡、那覇）の雑誌・新聞を調査し、その過程で注目すべき雑誌が出てきた場合、さらに裾野を広げていくという手順を踏んだ。東京については、「中央」という概念との区別が難しいところもあるが、たとえば、読売新聞社が刊行していた「月刊読売」などを見てもいまだほとんど研究されていないのが実情であったため、東京もひとつの「地方」と同列に扱い、同誌の調査を行った。

また、20 世紀メディア研究所が主宰する研究会、および 占領期メディアデータベース化プロジェクト委員会作成の「占領期新聞・雑誌情報データベース」を補足するようなデータベースの構築に向けての準備も進めた。特に、共同研究のメンバーを予定している吉田則昭は、ここ十年あまりにわたって、上記「占領期新聞・雑誌情報データベース」の作成に携わってきた人材であり、データベースの構築作業においては氏の見識と経験が最大限に活用できたと考えている。

研究の第二段階では、共同研究のメンバーがそれぞれの関心に基づいて学会、研究会などで発表を行いつつ、個別の論文を作成するとともに、本プロジェクトのテーマと関連するかたちで、すでに予定されている単行本、叢書の刊行にも力を入れた。ただし、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災とその後の原発事故によって福島県南相馬市（小高区）全域が半径 20 キロ以内の警戒区域に指定され、当初、メンバーのひとりである住友直子が調査しようとしていた埴谷島尾記念文学資料館が立ち入り禁止になってしまうというトラブルもあった。本人は研究テーマの変更を余儀なくされたが、同記念館の資料は本人の研究にとって必要不可欠のものであり、いまだ立て直しができていない状況である。第三段階では、20 世紀メディア研究所の活動に加わっている研究者とも交流し、占領期の雑誌研究に関心をもつ研究者を集めた研究会で積極的な発表を行った。また、吉田則昭がロシアでの学会発表、資料調査を行い、井川充雄がアメリカ公文書館などでの調査を進めたのをはじめ、海外資料の取集にも力を入れ、占領期の日本を外部から捉えなおす試みも一定の成果を収めることができたと考えている。

次に個別の経過・成果について報告する。石川は占領期に地方で刊行された総合雑誌をリストアップし、それらの資料収集を行ったうえで解題と総目次の作成に取り組んだ。占領期に香川県高松市の四国新聞社から刊行されていた雑誌「四国春秋」について調査を終えて解説・総目次を活字化したほか、同時代に読売新聞社から刊行された「月刊読売」についてもデータベースの作成+解題の執筆が終わっており、2013 年秋には京都の三人社か

研究【経過・成果】の概要　つづき

ら『「月刊読売」総目次と解題』および復刻版が刊行される予定になっている。また、この間、資料収集につとめてきたカストリ雑誌に関しては、単独のテーマで研究論文を執筆してきたが、今後はカストリ雑誌という雑誌メディアそのものに関する総論的な研究書を刊行する予定である（出版社は未定）。もうひとつ、石川の場合は福岡という土地を中心とした戦後「地方」文化の発達にも関心をもっており、こちらもこの 2 年間で相応の成果をあげることができた。次に、井川充雄は地方の公共図書館や大学図書館の所蔵状況も確認しながら地方新聞のデータベースの補完作業、各新聞の発行年、創刊者、組織、人員等の書誌情報を更新する作業を行なってきた。井川にはすでに主著『戦後新興紙と GHQ 新聞用紙をめぐる攻防』（世界思想社）があるが、この間の調査研究はその仕事をさらに推し進めることにつながったと考えられる。また、東日本大震災後の社会状況をふまえて、井川は『原子力と冷戦 日本とアジアの原発導入』（花伝社）の編著も行ったが、この研究にも SFR の成果は反映されている。特に原子力と冷戦構造の関係などはアメリカ側の資料が重要な意味をもつため、SFR を用いたアメリカ出張が大きな意味をもったと考える。吉田は、2011 年 8 月に「占領期日本における海外文化受容の実態」と題して海外の日本研究学会で発表するなど、本研究の課題に即したかたちでめざましい成果を発表した。モスクワでの資料調査では、占領期の日本におけるソ連文化の受容など、新たな研究テーマを見いだし、「海外文化の受容」という観点から本プロジェクト研究に取り組んだ。また、ジャーナリスト・緒方竹虎の評伝を執筆する過程で、それに関連する占領期雑誌の調査を行ない、新書にまとめて刊行した。吉田が中心となって進めた 20 世紀メディア研究所、各種メディア研究グループとの連携・交流については、学会発表、論文発表などの機会を与えていただくことになり、共同研究としてのメリットを最大限に活用できたと考える。住友は、20 世紀メディア研究所の「占領期新聞・雑誌データベース」を基盤に占領期の総合雑誌、文芸誌（企業・刑務所等発行の雑誌の文芸欄も適宜調査に含む）から、占領期文芸思想に関連する雑誌記事の絞り込みを行った。対象とする雑誌記事は発刊の辞・批評・随筆・座談会（小説も補助的に含む）など詳細を極めており、今年度はその成果が活字化される予定である。本来、計画していた研究については福島原発の事故により資料館への立ち入りができなくなったため、当面、中止せざるを得ない状況だが、立ち入り禁止は長期間に及ぶことが予測されているので、今後は研究テーマの再検討なども必要になるだろう。

その他、この一年間の研究活動を通して新たな展開をみせたテーマについて、その進捗状況をまとめておく。代表者の石川は、さきに述べたカストリ雑誌と同様に、地方都市で刊行された総合文化雑誌に関する研究を続け、これまでの九州、四国地方に加えて中国地方にも関心を広げている。井川は、地方の公共図書館や大学図書館の所蔵状況も確認しながら地方新聞のデータベースの補完作業を行うとともに、関東および関西エリアでの資料収集を行っている他、アメリカのラジオ放送 VOA のプロパガンダ政策にも関心を広げており、これまでの新聞という媒体にラジオ放送を加えるかたちで占領期のメディア状況を分析している。吉田則昭は、占領期の海外文化受容の実態について、特に文化のアメリカナイゼーションを相対化する視点で調査研究を行っている。今後はジャーナリスト・中野正剛の評伝を執筆する予定であるため、当該人物にゆかりの深い福岡博多に関する占領期雑誌を調査している。戦後日本の雑誌文化の軌跡を共編著で刊行する活動に関しては、すでに数冊の共著を刊行しているが、今後も、雑誌文化、大衆文化についての資料収集を行い、占領期のメディア研究に関する新しい資料を提示していく予定である。

※　この（様式２）に記入の、経過・成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③　ンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④　その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

1　雑誌論文

▽石川巧「事件現場としての〈団地〉―横溝正史『白と黒』論（「敍説」第Ⅲ期―9 号、127-143 頁、花書院出版、2013 年 2 月）
▽石川巧「被爆者はどこに行ったのか？―占領下の原爆言説をめぐって」（「Intelligence」第 13 号、2013 年 3 月、38-47 頁、20 世紀メディア研究所編）
▽「雑誌「四国春秋」解題と総目次」（「日本文学論叢」第 11 号、177‐241 頁、2011 年 8 月・立教大学大学院）
▽井川充雄「永末英一と世論調査」（「Intelligence」第 12 号, 2012 年 3 月, 20 世紀メディア研究所、85-94 頁）
▽井川充雄「VOA フォーラム－「教養番組」とプロパガンダの交差するところ」(土屋由香・吉見俊哉編『占領する眼・占領する声 CIE／USIS 映画と VOA ラジオ』東京大学出版会、2012 年、77-99 頁)
▽吉田則昭「アウトサイダーとしての占領期雑誌：カストリ雑誌の資料状況」（「文献継承」第 20 号、金沢文圃閣、2012 年 3 月、1-2 頁）
▽吉田則昭「書評・里見脩『新聞統合』」（「メディア史研究」32 号、2012 年、150-158 頁）

2　図書

▽石川巧『万博と文学―〈人類〉が主語になるとき』（『文科の継承と展開』、勉誠出版、2011 年、608 頁）
▽石川巧『高度経済成長期の文学』（ひつじ書房、2012 年、564 頁）
▽石川巧・川口隆行編著『戦争を〈読む〉』（ひつじ書房、2013 年、260 頁）
▽加藤哲郎・井川充雄編『原子力と冷戦 日本とアジアの原発導入』花伝社、2013 年、269 頁）
▽吉田則昭『緒方竹虎とＣＩＡ －アメリカ公文書が語る保守政治家の実像－』（平凡社新書、2012 年、244 頁）
▽吉田則昭「出版メディアの歴史」（川井良介編『出版メディア入門』第 2 章、日本評論社、2012 年、304 頁）
▽谷川建司編著『占領期のキーワード 100 1945-1952』青弓社、2011 年、367 頁）
▽吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史』森話社、2012 年、305 頁）

3　その他（学会発表）

▽石川巧「占領下の原爆言説―カストリ雑誌は何を伝えたか」（原爆文学研究会、2012 年 3 月 17 日）
▽石川巧「占領期の福岡における製紙・印刷・出版」（福岡市史研究会、2011 年 11 月 5 日）
▽井川充雄「VOA Forum―ラジオの作る『教養』」（20 世紀メディア研究所第 62 回研究会、早稲田大学、2011 年 9 月 24 日）
▽IKAWA, Mituso, "Public opinion analysis concerning atomic energy of Japan in the 1950's by USIA", Atomic Ordering on the Borders of Japan:Workshop, Dept of East Asian Studies/New York University, March 19th and 20th, 2012
▽ Noriaki YOSHIDA "The Reception of SoViet Culture in Japan During the Occupation Period"(Section7:History),EAJS,Tallinn. Estonia, August,26,2011 Noriaki YOSHIDA "Восприятие советской культуры в Японии период а оккупации(1945 -1952)"
▽吉田則昭「戦後における「中野正剛」再考―反軍・革新のシンボルと語られたイメージ―」（早稲田大学 20 世紀メディア研究所研究会、2013 年 3 月 30 日）
▽吉田則昭「緒方竹虎と戦後「情報機関構想」再考」（早稲田大学 20 世紀メディア研究所研究会、2011 年 6 月 25 日）